九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

初心セラピストの居場所活動での体験報告 ： スタッフの役割に着目して

盧，秋一
九州大学大学院人間環境学府

丸本，さくら
九州大学大学院人間環境学府

新納，あんり
九州大学大学院人間環境学研究院

火ノ口，史野
九州大学大学院人間環境学府

https://doi.org/10.15017/7177938

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 15, pp.163-167, 2024-03-15. Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

Bulletin of Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University
Vol. 15, pp. 163－167.

初心セラピストの居場所活動での体験報告

―スタッフの役割に着目して―

盧　秋一　九州大学大学院人間環境学府　／丸本さくら　九州大学大学院人間環境学府　／
新納あんり　九州大学大学院人間環境学研究院　／火ノ口史野　九州大学大学院人間環境学府

要約

本研究は居場所活動「ここりーと」で学生スタッフがどのように子どもと関わっているのか，どのような役割をしているのかについて検討した。スタッフとしての役割は運営や子どもたちに安心・安全な場所を提供することである。メンバーとしての役割は自分の世界を他人に開示することやリラックスして居られることである。両者の役割の間で揺れ動きながらもナナメの関係が成立した。そして，子どもの考えや気持ちを受け止めた上で中立的な立場から関わり，子どもにとって近づきすぎず，知り過ぎない存在となった。役割の枠を外すことで，スタッフがその場に適した反応や行動をし，活動を円滑に進めるための原動力にもなった。しかし，臨床経験の少なさや構造などの原因により，スタッフたちが役割の定まらなさに揺れ，困惑する時もあった。その解決策として，スーパービジョンや振り返りをすることにより，子どもの理解や関わりを促進し，活動の中で新たな気づきを得て，今後の活動に活かすことを目指す。

キーワード：居場所活動，役割，ゆれ

Ⅰ．問題と目的

1．居場所活動の発展

子どものための居場所活動は学校内での居場所として提唱され，現在では学校だけでなく地域での居場所活動も盛んに行われている。1992年，文部省学校不適応対策調査研究協力者会議では，不登校問題に関して「登校拒否（不登校）問題について―児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して―」を報告した（北海道保健福祉部，2018）。ここでは，居場所の定義は物理的な空間ではなく，「自己の存在感を実感し精神的に安心していられる場所」であるとし，学校内での居場所づくりの必要性を指摘した。さらに，社会から孤立する子どもや若者に対して「家でも学校でも職場でもない第３の場所」が必要であることも指摘され，地域における居場所活動も行われている（内閣府，2019）。内閣府（2022）の調査によると，各地方公共団体を対象とした調査だけでも子どもの居場所活動は508件であり，対象者は０歳～18歳，活動内容は学習支援，生活習慣の習得支援，食事の提供や体験活動と多岐に渡っている。

2．居場所活動の目的とスタッフの役割

実際に居場所活動を行なっていく上では，居場所のスタッフの在り方が子どもにとって居場所であるという感覚に影響を与える。居場所活動の目的として，①一人一人の存在を受容することによって，参加者がありのままに居られること，②活動に参加している人との関係性を構築することによって，参加者がその集団への帰属感を感じること，③活動時他者から肯定的な評価を受けることによって自分の可能性を信じることの３点が述べられている（生田，2019）。つまり対人関係を築いていき自分を信じられるような過程を築いていくために，居場所活動に参加する子ども同士の関係や子ども－スタッフ間の関係にスタッフは留意する必要がある。特に子ども－スタッフ間の視点から考えると，スタッフは子どもとの関係の中で単に運営を行うスタッフとしての役割を担うだけではなく，一個人である自分としての存在というメンバーとしての役割が子どもとの関係や居場所を支えている。また，居場所活動の事例について取り上げられた研究によると，子どもが居場所に居ていいと思える安心感や信頼感を保つためには，「信頼できる大人」の存在の重要性が指摘されている（田村，2016）。子どもが居場所として感じるには，大人であるスタッフが子どもに安心感や信頼感を抱いてもらえるような取り組みや振る舞いが重要である。以上より，子どもにとっての居場所をつくっていくためには，居場所活動にいるスタッフたちがどのように支援を行っていくのか，どのような取り組みが望ましいのかを考えるべきである。

3．本研究の目的

「ここりーと」は特定非営利活動法人九州大学こころとそだちの相談室において不登校や軽度発達障害，引きこもりなどさまざまな適応上の困難を抱えた方を対象に，物理的や心理的居場所を提供することを目的として2008年に開設された。第一筆者は学生ボランティアとして活動に参加している[1]。当活動の特徴は臨床心理士や臨床心理学を学ぶ大学院生がスタッフである点にある。しかし，当活動は居場所活動であるため，専門家による「治療」や「教育」ではなく，子どもが安心して過ごすことが目的である。そのため，スタッフは臨床心理学の専門家としての役割よりも先に，当活動の時間を共に過ごす一員として参加をすることを方針としている。このような方針の中でスタッフは心理臨床を学んでいる中で自分自身として過ごすこと，スタッフとしての自分とメンバーとしての自分としての過ごし方など，子どもにとっての居場所として機能するための支援や活動の仕方に迷いや「ゆれ」が生じてくる。本稿では，その「ゆれ」の活動の質を維持，向上させる機能的な存在として捉えながら，「ゆれ」の功罪について吟味し，そのような「ゆれ」が何から来るのか，ゆれの影響を考察することによってここりーとでのスタッフのあり方・支援の仕方について検討することを目的とする。

Ⅱ．居場所活動「ここりーと」の概要

ここりーとでは，専門の相談機関を継続して利用可能なおおむね10歳～18歳を利用対象としている。利用希望者には活動見学や相談員による受理面接を実施し，活動導入の可否を判断する。見学時，ここりーとに入り，スタッフたちや子どもと一緒

に過ごすことになっている。本研究の目的で述べたとおり，当法人で雇用されている臨床心理士，ボランティアで臨床心理学を学ぶ大学院生がスタッフとなっている。2023年度は臨床心理士１名，大学院生３名がスタッフとして参加している。ここりーとにいる臨床心理士の相談員はまとめ役として動き，学生スタッフと一緒に活動している。利用者との連絡や会計などの業務をする以外，他相談員との連携を行い，随時に学生スタッフと親面の情報を共有し，利用者の現状理解へつなげる。学生スタッフはここりーとの利用時間時，利用者とともに過ごし，活動終了後は活動記録の作成を行う。相談員と学生スタッフは活動後，当法人に登録されている相談員（臨床心理士有資格者）による振り返りを受けている。2020年度まで大学院生はシフト制で１回の活動に２名ずつの参加であったが，2021年度以降，活動の安定化のため毎回の活動にスタッフ全員が参加する形式に変更した。またスタッフは，ここりーとの構造として，毎週金曜日の13時～16時に活動を行なっており，その間に利用者（以下，子ども）は自由に入退室することが可能である。場所はカウンセリングルームのプレイルームを拠点としており，子どもの希望に応じて相談室周辺の外のスペースでの活動や外出も可能である。当活動は特に決まったプログラムは設定されておらず，原則として自由にその日の活動が行われている。具体的には相談室にある玩具，ゲームで遊ぶこともあればお話をして過ごすこと，子ども自身が持ってきたもので遊ぶことも可能である。さらに2020年には感染症拡大の影響を受け，オンラインでの活動も実施された。2021年度以降は対面のみの実施である。子どもの参加や欠席時には連絡を必要としていないが，利用の際には単回1,200円もしくは月額4,000円の利用料が必要である。利用料金はここりーとの運営，維持費に充てられる。学生スタッフに対しては交通費の手当が支給されている。

１．スタッフとしての役割・メンバーとしての役割

メンバーとスタッフの役割は，文脈依存的であり，両役割を共に持ち合わせ，柔軟に行き来しながらスタッフは活動している。それぞれの役割として，まず，スタッフ役割としては，①運営に携わること，②ここりーとで過ごす子どもたちの安心と安全を守るための行動をとることが求められる。具体的には，①としては，物品や場所の確保・提供，代金の受け取り，体験・見学のマネジメント，説明，宣伝等である。スタッフが同じ目的や目標に向け，ここりーとを正しい方向に進める。①なくしてここりーとは存在・存続しえないことは明らかである。また，②としては，時間のマネジメントをすること，危険な行動に対して制限を加え，代案の提案をすること，子ども同士の間に入って関係の調整を行い，傷つき体験を防いだり，意思疎通をサポートしたりすること，子どもの言葉にならない気持ちを必要に応じて代弁すること，より良い居場所の提供のため，毎回の振り返りを行うこと等が挙げられる。②のような役割を取ることによって，ここりーとの安心・安全感を守ることが可能となっている。

メンバー役割としては，①自分の世界を開示すること，②リラックスしてその場に存在することが挙げられる。具体的には，①としては，趣味などの自己開示，ついていくだけでなく，自身の発想も入れながら遊びや話を展開していくことなどが挙げられる。澤田（2019）は学校において，教職員は一人ひとりの子どもが多くの大人に対して見せる多様な側面を受け止めるために，豊富な「ナナメの関係」を教職員間で共有して多角的に子どもの理解につなげていく必要があると述べた。学校と同様に，ここりーとではスタッフが子どもにとって「ナナメの関係」として位置付けられ，スタッフが遊び相手・話し相手・力を試す相手・発表する相手となっているのではないかと考えられる。そして複数なスタッフが多様な関わりをすることによって，子どもは他者が自分への接し方と他者同士の関わり方を観察するきっかけとなり，今後集団の中で自分がどのように他者と関わっているのかを考える大切な機会となった。②としては，必ずしも子どもとの関係を求めず，何もせず座ったり，スタッフ同士で遊んだり話したりすることなどが挙げられる。スタッフが様々なあり方で参加することは，子どもたちそれぞれのあり方を自然と肯定する。また，スタッフのあり方や人との関わり方は，子どもたちのモデルとしても機能すると考えられる。

しかしながら，実際にはここりーとのスタッフは，問題と目的で述べた通り，スタッフとしての役割と，メンバーとしての役割の間で揺れ動く。ここりーとは，子どもたちが安心して過ごせる居場所として機能することを目指し，基本的に何をして過ごしても良いという環境の下で，子どもとスタッフには自由が与えられている。しかし，活動に参加した当初は何をしたら良いのか分からず，戸惑いや迷いを感じることもある。特に，臨床経験が浅い大学院生は，子どもたちとの交流や遊びの対応に追われ，子どもたちへの対応を活動中に内省しながら参加することは難しい。このような状態が長期間続くと，余裕のなさによる感情表出や身体動作が子どもたちに伝わり得るかもしれず，学生スタッフの心境が無意識に子どもたちの居心地に影響を与えている可能性は否定できない。このような「ゆれ」が続く状態は，対人関係や集団力動による気持ちの「ゆれ」を生じさせると同時に，子どもたちと一緒に居心地の良い場所を構築するというスタッフたちの目指す本来的な役割と子どもたちと一緒に居心地よく過ごすというメンバー役割の間にも葛藤を生じさせる。しかしながら，それらのスタッフが抱く「ゆれ」は活動に機能的な側面もある。スタッフの「ゆれ」の体験することは，スタッフが活動中における，子どもたちとスタッフ自身に向けた行動や態度とスタッフ自身の役割を内省するきっかけとして機能する。そのような「ゆれ」は，臨床心理士の資格を持った相談員スタッフが活動を見守っている心理的に安全な空間で体験されている。さらに，活動中の出来事やスタッフの気づきは，活動の事後に行われる振り返りやスーパービジョンで共有される。その時間でスタッフは，活動中の自分自身の役割について考える機会が高い頻度であり，各々の内面に生じる役割の「ゆれ」を自覚することによって，活動中の不全感や言語化が難しい葛藤を振り返り，次回の活動への臨み方を考えるのである。したがって，スタッフ役割とメンバー役割の間で「ゆれ」を体験することは，スタッフの心理的葛藤を生み出してはいるものの，活動の質を維持，向上させるための機能的な側面も無視できない。役割の「ゆれ」は早急に解決が求められ，排除されるべきものではなく，スタッフ各々が，この「ゆれ」が生じる要因を熟考し，継続的な付き合い方を考えていくことに意義があると考えられる。

２．子どもにとってのメリット・デメリット

スタッフが，スタッフ役割だけでなく，メンバー役割も担うことによって，子どもにどのような影響を与えているのだろう

か。アクスライン（1959）の８原則にある通り，プレイセラピーであれば，遊びの主体は常に子どもにあり，セラピストは子どもの意向に従い，子どものペースに合わせるべきであるとされている。一方，ここりーとでは，スタッフそれぞれにも主体性があり，子どもの意向やペースに沿うだけでなく，自分らしさを発揮していく。そうすることで，新たな遊びや話の展開が生じている。そうした中で，子どもは自分の世界を完全に表現しきれないと不満を感じることもあるだろう。しかし，日常の人間関係では，自分の世界を完全に表現しきれることの方が稀であり，折り合いをつけることが求められており，こうした不満はごく自然なものであると捉えることもできる。ここりーとの中では，スタッフ役割を取る人がいること・スタッフ役割を取る瞬間があることで安心・安全が保障され，その中で，相手の世界を受け入れたり，自分の世界を受け入れてもらったり，並行世界になったり，融合したりと，様々なパターンが生じる。より日常に近い人間関係を安全に経験できることは他の場所では得難い経験であると考えられる。また，村瀬（2008）は，大人が，「よい子どもらしさ」と成人としてのモデルになるような成熟と同時に併せ持っていることの重要性を示している。なお，伊原・増田ら（2010）は大人たちが「子どもらしさ」を発揮し，楽しもうとする姿勢を示すことで，結果的にそれが子どもたちのモデリングを促し，子どもが「子どもらしく」楽しめるようになることを促進したと考えられると述べている。つまり，ここりーとでも，スタッフの自然な振舞いや，スタッフ同士の自然なやりとりは，リラックスした雰囲気を醸成するとともに，モデルとしても機能すると考えられる。さらに，スタッフは子どもの何かを変えようと動くわけではないため，子どもそれぞれが抱える問題に介入されすぎないということも子どもにとってはメリットになりうる言だろう。この場所・時間の間，問題を一旦保留にして過ごすことができるため，より気軽に利用できる場所になっていると言える。スタッフでありながらメンバー役割も担うというあり方は，上述した通り良い側面もある一方で，子どもにとっては，近しい存在でありながらもどこかで線引きがあるということでもある。ここりーとでは，集団で何かをすることがあれば，個別的な関わりも見られる。水野（2016）はこのような居場所活動での関わりの問題点として，支援する者とされる者の固定化の危険性，相互依存，関係性の長期化などを挙げた。ナナメの関係を継続する以上，子どもに自分の話を教える時，どこまで話せるのか，話せないのかについて考える必要がある。スタッフのことをもっと知りたい，もっと親しい存在になりたい，ものをあげたい等が出てくることもあるが，そうした期待には応えられないということに対する申し訳なさ・切なさがあり，スタッフ役割とメンバー役割で揺れるスタッフたちは，戸惑いを感じているのかもしれない。

Ⅲ．考察

１．役割の「ゆれ」が生じる要因

居場所活動では，臨床心理学を学んでいる学生はその専門性を活かしながら関わることができ，様々な場面において見立てをした上で対応することが特徴である（伊原・増田ら，2010）。しかし，ここりーとは子どもたちが安心して過ごせる居場所を提供することを目指しているため，本来，スタッフたちは臨床心理学という専門的視座のみによる見立てをもって，子どもたちの感覚や世界観を理解しようと試みるわけではない。Ⅱで述べられたように，スタッフは居場所活動の中で，臨床心理学の専門家役割の「ゆれ」にも直面しており，ここりーとの居場所活動は，スタッフ役割とメンバー役割の間の「ゆれ」を抜きにして構造化されているとは言い難い。そのため，役割の「ゆれ」を考察し続けることは，今後の居場所活動におけるスタッフの在り方と支援を考える上では，重要であると考えられる。そのため，本節では筆者らの学ぶ臨床心理学的な知見を援用しつつ，「ゆれ」が何に由来し，ゆれがどのように活動に影響しているのかを考察することを通して，今後のここりーとでのスタッフのあり方・支援の仕方について検討していく。

「ゆれ」を生じさせている最も考えうる要因には，スタッフの臨床経験年数が浅いことが挙げられるだろう。対人援助職の養成課程にある学生ボランティアが活動に参加していることは注目に値する。臨床経験が浅い「初心セラピスト」という時間的制約にある者が，役割の定まらなさを経験することは容易に考えうる。例えば，居場所活動においてスタッフは，子どもたちと全く関わらないこともある。あるスタッフだけが子どもたちと遊び，別のスタッフはスタッフ同士で会話をしたり，ボードゲームをしたりすることもある。プレイやグループというセラピストの役割が理論的根拠によって支えられているセラピーとは違い，役割が文脈依存的である本活動には固定的な役割は存在しない。そのため，初心セラピストは，普段の専門的な支援構造の文脈で役割を取ることが難しく，流動的なスタッフ役割とメンバー役割との間の定まらなさによる「ゆれ」を困難として経験している可能性が高い。反対に，新保（2007）は，臨床経験がある熟達化した臨床家に共通する８つの特徴のうち，特定の領域における，ずば抜けた知識構造，豊富な現場経験，領域固有性（文脈化された知識）を挙げている。すなわち，長い臨床経験で培ってきた臨床知は，臨床家の役割をただ文脈依存的なものに留めるだけでなく，その文脈に根差した知識の構造化を通して，役割を柔軟に定めている可能性が考えられる。つまり，スタッフの経験年数が浅く，初心セラピスト自身が支援の枠組みに役割の根拠を求められないということが，役割の「ゆれ」を生じさせている可能性が考えられる。

しかしながら，この「ゆれ」はスタッフの臨床経験の少なさから由来する未熟さという側面だけを強調するものではない。「ゆれ」が生じていることが，ここりーとの居場所活動の質を追求し続ける原動力になっていることがⅡで述べられた。そのため，この「ゆれ」は経験の未熟さの他に，活動の構造に理由を求めることができる。特に，スタッフによる振り返りの構造は，役割の「ゆれ」と大いに関係があると考えられる。本活動は，子どもたちが帰った後に，当法人に登録されている相談員（臨床心理士有資格者）と振り返りを実施している。その振り返りの中で，その日あったことの報告とスタッフ各々が感じた体験を報告する。そこで，子どもたちへの対応の困難さや活動の中の気づきを対話の中で深めていくことによって，スタッフ各々が今後の子どもたちとの関わりについて考える。岩壁・金沢（2006）は，年齢の低い臨床家ほどコンサルテーションを重視し，スーパービジョンなどの指導が困難を乗り越える重要な方法であると述べている。つまり，スタッフは常に「ゆれ」という困難に直面するわけではなく，各々の役割の「ゆれ」を年長セラピストと一緒に毎週振り返り，考えることで，次週の子ど

もたちとの関わり方を工夫するきっかけを居場所活動にもたらしている。本活動は，一歩俯瞰した立場の相談員からアドバイスを頂く機会があることは事実であり，初心セラピストである学生スタッフにとっては貴重な学びの機会となり，新たな成長・気づきを得ている。しかし，振り返りを受けることによって，スタッフたちの疑問が必ずしも解決できている訳ではない。本活動は，臨床心理学的な枠組みのみで活動が構造化されていないため，スタッフの立ち振る舞いと役割が必然的に流動的であり，専門的知見に裏打ちされる妥当な答えを定めるのは，本活動の構造上の理由から難しい。そして，役割の「ゆれ」と共に，スタッフ自身の内面を的確に言語化する経験が浅いことからも，フォーマルな振り返りの質が制限されているかもしれない。活動中や前後の振り返りの時間以外でも，スタッフは常に活動で気になったことをスタッフ間で共有できる自由な活動構造になっているため，インフォーマルな振り返りをスタッフが自ら行っている。そのため，年長セラピストとの俯瞰的で客観的なアドバイスを含んだフォーマルな振り返りとスタッフ独自のインフォーマルな振り返りが振り返りという構造の中に混ざり合って内包されていることが，初心セラピストである学生スタッフの役割に対する認識の一貫性に影響を与えている可能性がある。このように，子どもたちとの活動中以外の振り返りというスタッフ側の構造にも「ゆれ」があり，そこから生じるスタッフの役割認識への「ゆれ」が，居場所活動の質を追求し続けるための原動力として継続的かつ機能的に維持されている反面，スタッフの役割認識への不安定さと非一貫性を「ゆれ」として経験している可能性がある。

２．今後の展望

初心セラピストの居場所活動における「ゆれ」は，学生スタッフの臨床経験の未熟さとスタッフ自身の役割の整理をする振り返りの構造が明確に定まっていないことが，現在の要因であることが考察された。「ゆれ」は，活動の質を担保するために，スタッフ自身にとっては大切な経験であり機能的であるが，同時に活動の振り返りの構造が再考された。現在の振り返り構造のあり方を再度，検討していくことで，スタッフ役割とメンバー役割と専門家役割の３つの間の「ゆれ」を整理できるようにしていく。居場所活動にいることは，子どもにとって多様な意味がある。活動内容や時間に縛られずに自由に自分の世界観を展開し，身体の動きや表情を通してそれらを共有する。少しずつではあるが，他者とのつながりを作り上げるとともに，複数の他者とのつながりも徐々に広がっていく。それはスタッフ自身にとっても貴重な体験となる。今後，ここりーとで活動をする際にスタッフとメンバーの役割の間に揺られながらも，そこで生じた葛藤や混乱を整理し，子どもに最適なサポートを提供するように活動を継続していくことである。スタッフも揺られながら，果敢に「ゆれ」を整理できるような振り返りの時間を含めて，居場所活動としていきたい。

〈付記〉

本論文を作成するにあたりご指導いただきました金子周平先生，特定非営利活動法人九州大学こころとそだちの相談室に深く感謝いたします。

文献

アクスライン，V. M.（1959）．遊戯療法．小林治夫（訳）．岩崎書店．

北海道保健福祉部．「子どもの居場所」に関する実態調査結果報告書．2018，https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/4/7/2/2/0/1/3/_/子どもの居場所に関する実態調査【H30】.pdf，（参照2023-8-7）．

岩壁茂・金沢吉展（2006）．心理臨床家の職業的発達に関する調査から：心理臨床家の直面する困難とその対処法について．日本心理臨床学会第25回大会発表論文集．

伊原出・増田有亮・平田裕太朗・熊丸都香・鎌田怜那（2010）．ココロンズによる野球を通した臨床心理学的地域援助：子どもの発達促進を目指して．球種大学総合臨床心理センター紀要，１，43-55．

村瀬嘉代子（2008）．心理療法と生活事象．金剛出版．

水野篤夫（2016）．若者支援とユースワーカー，田中治彦・萩原健次郎（編）若者の居場所と参加―ユースワークが築く新たな社会―．藤原印刷株式会社．

生田周二（2019）．子ども・若者支援における対話の一考察．奈良教育大学紀要，68（1），203-211．

内閣府．国及び地方公共団体による「子どもの居場所づくり」を支援する施策調べについて．2022，http://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/shien/pdf/about.pdf，（参照2023-8-7）．

内閣府．令和元年版子供・若者白書特集２：長期化するひきこもりの実態．2019，https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01honpen/s0_2.html，（参照2023-8-20）．

新保幸洋（2007）．統合的心理療法と心理臨床家の成長・発達～熟達化を切り口として～．大正大学地域精神保健研修会配布資料．

澤田英三（2019）．子どもにとって「ナナメの関係」はどのような役割を果たしているのか―生徒指導・進路指導において児童生徒の多面性を受容する存在として―．安田女子大学大学院紀要，24，29-43．

田村光子（2016）．子どもの居場所の機能の検討．植草学園短期大学紀要，17，31-42．

[1] 第二著者，第四著者は学生ボランティアとして，第三著者は当法人相談員として活動に参加している。

A Report on "*Ibasho-katsudo*" by Novice Therapists: Focusing on the Role of the Staff

Qiuyi LU
Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University
Sakura MARUMOTO
Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University
Anri NIIRO
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
Fumiya HINOKUCHI
Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

This study aims to elucidate the role of staff in"*Kokorito*,"known as "*ibasho-katsudo*," by examining how the staff members engage in daily activities with the service's users. The results indicate that the staff's primary responsibility is establishing a physically and psychologically safe and secure user environment. Simultaneously, staff members transition into the role of "members"to create an atmosphere that encourages users to comfortably open up to others psychologically. These two roles lead to the establishment of diagonal dyadic "Naname" relationships, fostering an attitude of acceptance with a neutral posi-tion among staff members. However, this ambitious role and somewhat unstable structure can sometimes lead to "*yure*" (con-fusion), as staff members grapple with concerns about their limited practical experience. Reflecting on their experiences with a proficient facility supervisor is one method for continuously exploring new insights for activities and navigating the role tr-ansitions. In the future, staff members will operate more effectively by embracing various perspectives.

Keywords: *ibasho-katsudo*, role, *yure*